

如き書を編して先づ縣民に其の概念を興へ、其の事業を根本的になせるは他に例を聞かず、本書は此の方面より見て一層意義を有するものと云ふべきなり。尙ほ此の書は非賣品なるも、特志家には熊本縣教育會に申込み實費を以て分與せらるべしと云ふ(梅原)

● 雜誌

● 五箇條御誓文の由來 子爵 金子堅太郎

(國學院雜誌第二十二卷第二號所載)

徳川慶喜大政を返還し奉り、當時、子爵由利公正(當時、三岡八郎)は王政維新の名分方針に就て岩倉具視公を訪問したる歸途、ふと心附きしまゝ、鼻紙に筆を走らせしものは即五箇條御誓文案の起源にして、同子爵死後、未亡人の示されたる三徳(紙入)中より該草案を發見せり。そはもと「議事之體大意」と前記して、一庶民志を遂げ人心をして倦まざらしむるを欲す、一士民心を一にして盛に經綸を行ふを要す、一智識を世界に求め廣く、皇基を振起すべし、一貢士期限を以て賢才に讓るべし、一萬機公論に決し私に論するなかれの五箇條の末に「諸侯會盟之御趣意右等之筋に可被申出哉。大赦の事 一列侯會盟の式 一列藩巡見使の式」と記されたものなりしを、由利子は更に福岡藩次兵、即子爵福岡孝悌に修正を依頼し、公卿の反對、木戸孝允の奏議ありて、終に慶應四年三月十四日を以て所謂五箇條御誓文の發表を見るに至れり。然るに

こゝに言へる由利子の原案に就て見るも、王政復古の精神とは不相應に平片主義の傾向を含有せる思想を認め得べし、而して其思想の源流に就ては私見を以てするに、横井平四郎(小楠)の所説を承くるものなるべし、平四郎は嘉永四年、由利子の國越前に至り經書の義を釋くと共に日本の時務に就ても大に論ずる所ありしが其時講者の一人たりし子は其所説に感激する所ありて師弟の約を結べり、平四郎は其後一旦肥前藩に歸りしも、越前侯の懇望により再び越前に來りて政治上の顧問に備り、萬延元年越藩施政の方針を決定せんが爲め、「國是三論」を著したりしが、其一節に墨利堅に於ては、華盛頓以來三大規模を立て、一は天地間の慘毒殺戮に超むたるはなき故天意に則て宇内の戰爭を息るを以て務とし、一は智識を世界萬國に取て治教を裨益するを以て務とし、一は全國の大統領の權柄賢に讓て子に傳へず」云々とあるは「智識を世界に求め」の章と酷似し、「英吉利に有つては、政體一に民情に本づき官の行ふ處は大小となく必民衆に讓り(中畧)出或出好(宣戰詔和の事)も亦然り」とあるは、萬機公論に決すといふ御誓文の箇條と意味を同じうす。小楠の感化を受け、小楠に私淑したる由利子は必ずや此國是三論を讀破したるなるべく、然らば同子草案の章句が、何れに準據せるかは略々窺知し得べしと信ず。

● 天鳥船

米田庄太郎

南洋の神話研究に於てマウイ神話の太陽神話と鳥類神話との關係は重要にして且興味ある一問題なるが、既にシルレン、アヘリス、シユルツ、フロベニユウス等諸氏の研究あり、而して我國神話中にも、天鳥船及天鳥船神の事以下、該研究の材料たり得べしと思惟せらるゝもの六ヶ條程あり。今天鳥船に關する記紀の記事を比較對照して、其間に存する觀念或は態度の差違を見るに、記に於ては天鳥船は常に人格化して觀念し、紀に於ては常に物質的のものとして觀念され、而して古事記に現はるゝ日本は海の日本にして大、洋的、詩的なる古代日本を傳へ、日本書紀は陸の日本を現はし、大陸的、合理的なる古代日本を傳ふ、これ兩書閱讀の際に吾人の受けたる一般的印象なり。記紀に存する天鳥船及び天鳥船神に關する記事は極めて簡單にして直接に天鳥船及天鳥船神の觀念及信仰に就ては學び得る所僅少なるが、記紀の註釋家の解釋を見るに二様の見解あり、一は之を鳥の飛ぶ如くに急行する船とし、二は之を水鳥の浮べる如く水上に浮ぶ船とせり。播磨風土記、萬葉集に現はるゝ思想より推考せば、我國に於ける鳥船の觀念は餘程古くより常識的、合理的なる意義に解せられ、神話的意義爲めに消滅せるが如きも、我國に於ける鳥船の觀念も、南洋、亞米利加、亞弗利加等の神話に存するが如く、元來神話的意義を有せしものに非るな

きか。太陽神話の發達する以前に、靈魂神話、魔術信仰及び祖先信仰の發達せしものなる事は疑ふべからざる事實なるを以て、マウイ神話と鳥類神話との關係を研究するに際し、太陽神話、マウイ神話以前の時代に於てマウイ靈魂、鳥との間に如何なる關係が信ぜられしやを見るを要するも、今は言及せざるべし。フロベニス氏は太陽神話の以前に於ける神話の出發點「鳥の形をなせる船が靈魂を彼岸に運ぶ」てふ神話的思想を分解して、一、鳥が靈魂を彼岸に運ぶ、二、船が靈魂を彼岸に運ぶ、三、靈魂は太陽に隨うて行くの三要素に歸せるが、余は天鳥船觀念の起源を研究し、我國古傳の天鳥船觀念の失はれたる原始神話的意義は猶右の如きものなりしと解し得べき材料を我古傳說中より求めん。鳥船の觀念神話的意義及其起源に就ては、シユルツ氏、ヅント氏の說もあれどもフロベニユウス氏が南洋神話に就て研究立說されたる說を最も穩當なりとすべく、我國の古傳に傳はれる天鳥船の觀念の原始神話的意義及び起源も亦大體に於て同氏の說と同様ならん。鳥船神話は三個の元素的神話の複合的神話にて、複合的神話の存在は元素的神話の存在を推察し得べく、又元素的神話の殘存によりて複合的神話の存在を推察し得べし。故に我國傳說及土俗中に其元素的神話の遺影を認め得るならば、其の複合的神話たる鳥船神話の太古我國にも行はれし事を推知し得べきなり。死後靈魂が鳥に化する

彙報

信仰は、倭健命の靈八尋白智鳥と化せられし傳説あり死後靈魂が鳥によりて彼岸に行く事は天若日子葬式に關する傳説あり、二、死後靈魂は船に乗りて彼岸に達する事の信仰は、船形の棺の存在によりて推察し得べく、三、靈魂が太陽或は天に上る思想は、本居宣長の否定説、橘守部の肯定説もさる事乍ら、土俗學上より考察して、靈魂が鳥に化するといふ信仰は、靈魂昇天の信仰の存在を間接に暗示するものなり。故に南洋・亞米利加・亞弗利加等の自然人民間に行はるゝ鳥船神話の三要素は大體上我國古傳古俗中に於ても發見さるゝを以て、日本書紀に全く合理化されて傳はれる天鳥船の觀念は始め神話的意義を有し、靈魂を太陽——少くとも天に運ぶ鳥形の船を意味せしに非るか。(以上中村)

●國史叢書の第二期刊行と史料通覽の續刊

國史研究會はさきに黒川真道氏を編纂主任として國史叢書を刊行し來りしが、昨年十二月を以て其第一期刊行豫定書三十五冊を完成したりしを以て更に本年一月より第二期豫定二十四冊の刊行に着手し、毎月一冊宛を配本しつゝあり。本期に於ては會員今村勝一氏新に主事となり、文學士矢野太郎氏を共編輯主任とし、第一期刊行書が史料として低級の譚ありしに鑒み、今回は大に其撰擇を慎み、學者に取つては史料となすべく、一般讀者にも趣味ある讀物たらんことを期し、編纂方針は之を史傳及史論考證の二部に分ち、更に史傳中を通・別の二大綱とし、通は略々時代を追うて叙述せるものにして、別は地方誌、戰誌、神祇釋教、政治經濟、風俗文藝に關するものを採れりといふ。今こゝに豫定書目を列擧すれば左の如し。

史傳 通誌 玉露叢 甘露叢 文露叢 寬明日記 續談海

別誌 關侍傳記 三家誌 武野燭談 津輕創業記 江戸軍記

秀吉事記 脇坂記 金山記 勢州軍記 加越登記 信陽

上田軍記 九州雜記 三國獲亂記 川上久國雜話 神宮